

各関係機関長 殿
病虫害防除員 殿

徳島県立農林水産総合技術支援センター
病虫害防除所長
(公印省略)

平成22年度農作物病虫害発生予察情報について

平成22年度農作物病虫害発生予報第12号を発表したので送付します。

平成22年度農作物病虫害発生予報第12号

平成23年3月1日
徳島県

I. 果樹
果樹共通

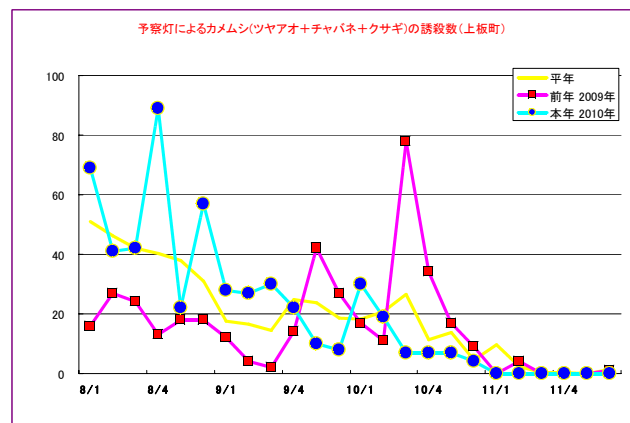
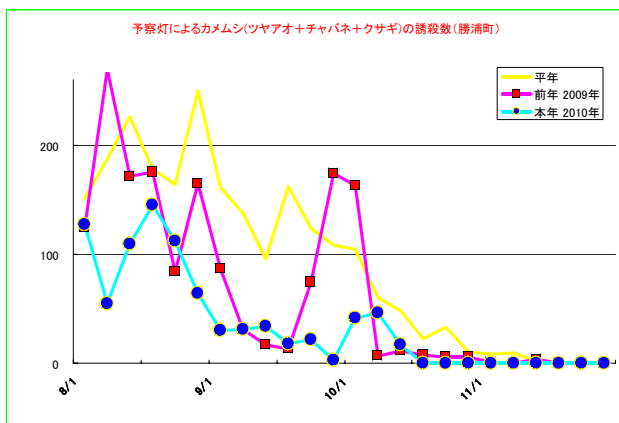
果樹カメムシ類

1) 予報内容

発生時期 平年並
発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 前年夏～秋期における予察灯への果樹カメムシ類の誘殺数は、平年並～やや少なめで推移した。



(2) 2月に実施したチャバネアオカメムシの越冬調査(11地点×2ヶ所調査)では越冬虫を確認できなかった(昨年は11地点×2ヶ所の調査で2地点で越冬を確認、越冬成虫数は0.09頭/m²、一昨年は11地点×2ヶ所の調査で2地点で越冬を確認、越冬成虫数は0.23頭/m²)。

(2) 2月25日発表の1ヶ月予報では、天気は数日の周期で変わり、晴れの日が多いが、気温は1週目の終わりから2週目にかけて低く、2週目はかなり低くなる可能性があるから見込まれている。

II. 野菜

冬春トマト

疫病

1) 予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 2月後半の巡回調査では、発生を認めていない(平年同時期は発生圃場率が8.7%, 発病度が0.2)。
- (2) 2月25日発表の1ヶ月予報では、天気は数日の周期で変わり、晴れの日が多いが、気温は1週目の終わりから2週目にかけて低く、2週目はかなり低くなる可能性があると思込まれている。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 気温が20℃くらいの低温で多湿の時に発生しやすいので、施設内が過湿にならないように換気を図る。悪天候が続いたりして十分な換気ができない場合には、暖房機のファンを作動させて、ハウス内の多湿化を防止する。
- (2) 窒素質肥料を過用すると茎葉が軟弱となり発生しやすくなるので、肥培管理に注意する。
- (3) 罹病葉は伝染源になるので、できるだけ早く摘み取って、ハウス外で処分する。
- (4) 病原菌は気孔から侵入するので、薬剤散布は気孔の多い葉の裏側を重点的に行なう。特に、下葉には丁寧に散布する。
- (5) 病原菌が侵入してからごく短期間で発病するので、発生を認めたら散布間隔を短縮して、集中的に薬剤散布を行なう。

灰色かび病

1) 予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 2月後半の巡回調査では、発生圃場率が25.0%, 発病度が0.5であり、ほぼ平年(29.6%, 5.4)並の発生である。
- (2) 2月25日発表の1ヶ月予報では、天気は数日の周期で変わり、晴れの日が多いが、気温は1週目の終わりから2週目にかけて低く、2週目はかなり低くなる可能性があると思込まれている。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 気温が20℃くらいの低温で多湿の時に発生しやすいので、施設内が過湿にならないように換気を図る。悪天候が続いたりして十分な換気ができない場合には、暖房機のファンを作動させて、ハウス内の多湿化を防止する。
- (2) 発病果や花弁などは伝染源になるので、できるだけ早く除去し、ハウス外で処分する。
- (3) 薬剤感受性の低下を回避するため、同一系統の薬剤の連用は避ける。

葉かび病

1) 予報内容

発生量 平年よりやや少なく(前年よりやや少ない)、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 2月後半の巡回調査では、発生を認めていない(平年同時期は発生圃場率が34.3%, 発病度が5.5)。
- (2) 2月25日発表の1ヶ月予報では、天気は数日の周期で変わり、晴れの日が多いが、気温は1週目の終わりから2週目にかけて低く、2週目はかなり低くなる可能性があると思込まれている。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 気温が20～25℃の比較的低温で多湿の時に発生しやすいので、施設内が過湿にならないように換気を図る。悪天候が続いたりして十分な換気ができない場合には、暖房機のファンを作動させて、ハウス内の多湿化を防止する。
- (2) 肥料切れは病勢の進展を助長するので、肥培管理に注意する。
- (3) 罹病葉は伝染源になるので、できるだけ早く摘み取って、ハウス外で処分する。
- (4) 病原菌は気孔から侵入するので、薬剤散布は気孔の多い葉の裏側を重点的に行なう。

(5) 薬剤感受性の低下を回避するため、同一系統の薬剤の連用は避ける。

コナジラミ類

1) 予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 2月後半の巡回調査では、発生圃場率が50.0%、寄生葉率が3.0%であり、平年(48.6%、5.5%)並の発生で、優占種はオンシツコナジラミである。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。また幼虫は葉裏に多く寄生しているので、薬液が葉裏にも充分付着するように丁寧に散布する。

(2) 薬剤抵抗性の発達をもたらす恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

冬春ナス

灰色かび病

1) 予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 2月後半の巡回調査では、発生を認めていない(平年同時期は発生圃場率が7.0%、発病果率が0.2%)。

(2) 2月25日発表の1ヶ月予報では、天気は数日の周期で変わり、晴れの日が多いが、気温は1週目の終わりから2週目にかけて低く、2週目はかなり低くなる可能性があると思込まれている。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 気温が20℃くらいの低温で多湿の時に発生しやすい。特に湿度の影響が大きいので、施設内が過湿にならないように換気を図る。悪天候が続いたりして十分な換気ができない場合には、暖房機のファンを作動させて、ハウス内の多湿化を防止する。また、灌水過多にならないように注意する。

(2) 朝夕の急激な冷え込みは発生を著しく助長するので、適切な温度管理に努める。

(3) 発病果や花卉などは伝染源になるので、できるだけ早く除去し、ハウス外で処分する。

(4) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。

(5) 薬剤感受性の低下を回避するため、同一系統の薬剤の連用は避ける。

うどんこ病

1) 予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 2月後半の巡回調査では、発生圃場率が33.3%、発病葉率が0.5%であり、ほぼ平年(3.3%、0.03%)並の発生である。

(2) 2月25日発表の1ヶ月予報では、天気は数日の周期で変わり、晴れの日が多いが、気温は1週目の終わりから2週目にかけて低く、2週目はかなり低くなる可能性があると思込まれている。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 発生が多くなってからでは防除が困難になるので、初期防除に努める。

(2) 罹病葉は早期に圃場外に持ち出し、病原菌密度の低下に努める。

(3) 薬剤感受性の低下を回避するため、同一系統の薬剤の連用は避ける。

すすかび病

1) 予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少～中」

2) 予報の根拠

(1) 2月後半の巡回調査では、発生圃場率が66.7%、発病葉率が7.3%であり、ほぼ平年(67.3%、12.9%)並の発生である。

(2) 2月25日発表の1ヶ月予報では、天気は数日の周期で変わり、晴れの日が多いが、気温は1週目の終わりから2週目にかけて低く、2週目はかなり低くなる可能性があると思われている。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 気温が25℃くらいで多湿の時に発生しやすいので、施設内が過湿にならないように換気を図る。悪天候が続いたりして十分な換気ができない場合には、暖房機のファンを作動させて、ハウス内の多湿化を防止する。また、灌水過多にならないように注意する。

(2) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。薬剤が下葉の葉裏にも充分付着するように丁寧に散布する。

(3) 薬剤感受性の低下を回避するため、同一系統の薬剤の連用は避ける。

アブラムシ類

1) 予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 2月後半の巡回調査では、発生を認めていない(平年同時期も未発生)。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。アブラムシ類は葉裏や芯芽に寄生しているので、薬液が葉裏にも充分付着するように丁寧に散布する。

(2) 薬剤抵抗性の発達をもたらす恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

ミナミキイロアザミウマ

1) 予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 2月後半の巡回調査では、発生圃場率が16.7%、寄生葉率が0.5%であり、ほぼ平年(10.0%、0.8%)並の発生である。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。

(2) 花器、新葉、葉裏、葉の重なった部分などに集まる習性があるので、それらの部分に薬液が十分かかるよう、丁寧に散布する。

(3) 薬剤抵抗性の発達をもたらす恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

オンシツコナジラミ

1) 予報内容

発生量 平年よりやや多く(前年並)、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 2月後半の巡回調査では、発生圃場率が33.3%、寄生葉率が2.5%であり、平年(19.3%、1.2%)と比べてやや発生が多い。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。また幼虫は葉裏に多く寄生しているので、薬液が葉裏にも充分付着するように丁寧に散布する。

(2) 薬剤抵抗性の発達をもたらす恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

ハダニ類

1) 予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 2月後半の巡回調査では、発生を認めていない(平年同時期は発生圃場率が2.0%、寄生葉率が0.1%)。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。ハダニ類は葉裏に寄生しているので、薬液が葉

- 裏にも充分付着するように丁寧に散布する。
- (2) 薬剤抵抗性の発達をもたらす恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

冬春キュウリ

うどんこ病

1) 予報内容

発生量 平年並で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 2月後半の巡回調査では、発生圃場率が100%、発病葉率が9.0%であり、ほぼ平年(44.0%, 10.0%)並の発生である。
- (2) 2月25日発表の1ヶ月予報では、天気は数日の周期で変わり、晴れの日が多いが、気温は1週目の終わりから2週目にかけて低く、2週目はかなり低くなる可能性があると思込まれている。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 発生が多くなってからでは防除が困難になるので、初期防除に努める。
- (2) 罹病葉は圃場外に持ち出し、病原菌密度の低下に努める。
- (3) 同一系統薬剤の連用は耐性菌出現の恐れがあるので避ける。

灰色かび病

1) 予報内容

発生量 平年並で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 2月後半の巡回調査では、発生を認めていない(平年は発生圃場率が8.0%、発病果率が0.2%)。
- (2) 2月25日発表の1ヶ月予報では、天気は数日の周期で変わり、晴れの日が多いが、気温は1週目の終わりから2週目にかけて低く、2週目はかなり低くなる可能性があると思込まれている。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 気温が20℃くらいの低温で多湿の時に発生しやすい。特に湿度の影響が大きいので、施設内が過湿にならないように換気を図る。悪天候が続いたりして十分な換気ができない場合には、暖房機のファンを作動させて、ハウス内の多湿化を防止する。また、灌水過多にならないように注意する。
- (2) 朝夕の急激な冷え込みは発生を著しく助長するので、適切な温度管理に努める。
- (3) 発病果や花弁などは伝染源になるので、できるだけ早く除去し、ハウス外で処分する。
- (4) 多発すると防除が困難になるので、初期防除に努める。
- (5) 耐性菌出現の恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

べと病

1) 予報内容

発生量 平年並で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 2月後半の巡回調査では、発生圃場率が66.8%、発病葉率が3.2%であり、ほぼ平年(48.0%, 12.2%)並の発生である。
- (2) 2月25日発表の1ヶ月予報では、天気は数日の周期で変わり、晴れの日が多いが、気温は1週目の終わりから2週目にかけて低く、2週目はかなり低くなる可能性があると思込まれている。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 施設内が過湿にならないように換気を図る。悪天候が続いたりして十分な換気ができない場合には、暖房機のファンを作動させて、ハウス内の多湿化を防止する。また、灌水過多にならないように注意する。
- (2) 肥料切れや着果過多などで樹勢が衰えた場合に激発するので、肥培管理に注意する。
- (3) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。薬剤散布は、葉の裏側を重点的に行なう。
- (4) 耐性菌出現の恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

アブラムシ類

1) 予報内容

発生量 平年並で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 2月後半の巡回調査では、発生を認めていない(平年同時期は発生圃場率が 2.0%, 寄生葉率が0.4%)。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 多発すると防除が困難になるので、初期防除に努める。アブラムシ類は葉裏や芯芽に寄生しているので、薬液は葉裏にも充分付着するように丁寧に散布する。

オンシツコナジラミ

1) 予報内容

発生量 平年並で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 2月後半の巡回調査では、発生を認めていない(平年同時期は発生圃場率が 4.0%, 寄生葉率が0.3%)。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 多発すると防除が困難になるので、初期防除に努める。コナジラミ類は葉裏に寄生するので、薬液は葉裏にも充分に付着するように丁寧に散布する。

(2) 薬剤抵抗性の発達をもたらす恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

ミナミキイロアザミウマ

1) 予報内容

発生量 平年並で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 2月後半の巡回調査では、発生圃場率が16.7%, 寄生葉率が 2.2%であり、ほぼ平年(4.0%, 0.4%)並の発生である。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 多発すると防除が困難になるので、初期防除に努める。

冬春ホウレンソウ

べと病

1) 予報の内容

発生量 平年より少なく(前年並)、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 2月後半の巡回調査では、発生を認めていない(平年同時期は発生圃場率が21.0%, 発病度が 3.8)。

(2) 2月25日発表の1ヶ月予報では、天気は数日の周期で変わり、晴れの日が多いが、気温は1週目の終わりから2週目にかけて低く、2週目はかなり低くなる可能性があると思われている。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 品種は、本病レース1～7に抵抗性があるものを利用する。

(2) 葉が繁茂すると被害が多くなるので、肥培管理に注意する。

(3) 春先の病勢の伸展を抑制するため、薬剤は予防的に用いる。

(4) 薬剤は予防的に、また下葉や葉裏にもよくかかるように丁寧に散布する。

(5) 罹病株を圃場に放置すると、次作の第一次伝染源となるので、発病株は速やかに処分する。また、春先に萎縮して奇形となった株はべと病に感染しているので、速やかに処分する。

アブラムシ類

1) 予報内容

発生量 平年より少なく(前年より少ない)、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 2月後半の巡回調査では、発生圃場率が20.0%, 発生程度指数が 0.2であり、平年(26.9%, 2.9)と比べ

て発生が少ない。

(2) 2月25日発表の1ヶ月予報では、天気は数日の周期で変わり、晴れの日が多いが、気温は1週目の終わりから2週目にかけて低く、2週目はかなり低くなる可能性があると思込まれている。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。アブラムシ類は葉裏や芯芽に寄生しているので、薬液が葉裏にも充分付着するように丁寧に散布する。

(2) 薬剤抵抗性の発達をもたらす恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

冬春イチゴ

灰色かび病

1) 予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 2月後半の巡回調査では、発生圃場率が7.1%、発病果率が0.1%であり、平年(9.1%、0.3%)並の発生である。

(2) 2月25日発表の1ヶ月予報では、天気は数日の周期で変わり、晴れの日が多いが、気温は1週目の終わりから2週目にかけて低く、2週目はかなり低くなる可能性があると思込まれている。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 気温が20℃くらいの低温で多湿の時に発生しやすいので、施設内が過湿にならないように換気を図る。

(2) 発病果は伝染源になるので、速やかに圃場から持ち出し処分する。

(3) 薬剤感受性の低下を回避するため、同一系統の薬剤の連用は避ける。

うどんこ病

1) 予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 2月後半の巡回調査では、発生を認めていない(平年同時期は発生圃場率が7.5%、発病葉率が0.1%、発病果率が0.3%)。

(2) 2月25日発表の1ヶ月予報では、天気は数日の周期で変わり、晴れの日が多いが、気温は1週目の終わりから2週目にかけて低く、2週目はかなり低くなる可能性があると思込まれている。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 発生が多くなってからでは防除が困難になるので、初期防除に努める。

(2) 古葉を早めに除去し、葉裏に薬液が十分かかるように丁寧に散布する。

(3) 罹病した果実や茎葉などは早期に見つけ、除去した後圃場外に持ち出し、病原菌密度の低下に努める。

(4) 薬剤感受性の低下を回避するため、同一系統の薬剤の連用は避ける。

アブラムシ類

1) 予報内容

発生量 平年よりやや多く(前年並)、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 2月後半の巡回調査では、発生圃場率が21.4%、寄生株率が4.0%であり、平年(11.5%、1.1%)と比べてやや発生が多く、一部に発生が多い圃場も見受けられている。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。アブラムシ類は葉裏や芯芽に寄生しているので、薬液が葉裏にも充分付着するように丁寧に散布する。

(2) 薬剤抵抗性の発達をもたらす恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

ハダニ類

1) 予報内容

発生量 平年よりやや多く(前年並～やや多い), 発生程度は「少～中」

2) 予報の根拠

(1) 2月後半の巡回調査では, 発生圃場率が50.0%, 寄生葉率が12.1%であり, 平年(34.6%, 4.4%)と比べてやや発生が多く, 発生が確認された圃場における寄生葉率が高い。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。ハダニ類は葉裏に寄生しているので, 薬液が葉裏にも充分付着するように丁寧に散布する。

(2) 薬剤抵抗性の発達をもたらす恐れがあるので, 同一系統の薬剤の連用は避ける。

III. その他

1. 施設栽培において暖房機の最低気温の設定値を下げ過ぎると, 低温性病害の発生を著しく助長する恐れがありますので, ご注意下さい。
2. 薬剤の使用に当たっては必ず使用基準を遵守し, 周辺作物等へ飛散しないようにして下さい。

発生量の表示

発生程度 : 甚 > 多 > 中 > 少 > 無

発生量 : 多い > やや多い > 並 > やや少ない > 少ない

徳島県立農林水産総合技術支援センター病虫害防除所
テレホンサービス : 0 8 8 3 (2 6) 1 1 9 9
U R L : <http://www.pref.tokushima.jp/tafftsc/boujosyo/>

○ 病虫害の発生予察情報, 発生状況, 防除法等をお知らせしています。